

# 生涯学習時代の日越大学改革シンポジウム

2003 年度 鹿児島大学ベトナム訪問団



秋山:おはようございます。私は秋山です。鹿児島からまいりました。シンポジウムを開催します。今日のシンポが有意義な会議になりますようご協力ほどよろしく申し上げます。今日は司会を勤めさせていただきます。それでは早速オープニングの挨拶を神田先生にお願いします。

神田:こんにちは。私は鹿児島大学の神田です。皆さんにお会いできてうれしいです。鹿児島大学の教育学部の教授です。この度、ベトナムの大学と交流をしたいと望んでいます。今日お集まり頂いた方々にお礼申し上げます。(ベトナム語で挨拶)

秋山:それでは早速ですが、用意されている報告に移らせて頂きます。午前中に三つの報告を用意してあります。報告時間ですが、一人15分から20分でお願いします。

第1報告は生涯学習教育研究センター長の神田先生からです。

## 【第1報告】

### 1. 「日本の教育改革・大学改革の特徴」

生涯学習教育研究センター長 神田 嘉延

私のテーマは日本の教育改革・大学の改革の特徴についてです。OHPをご覧ください。

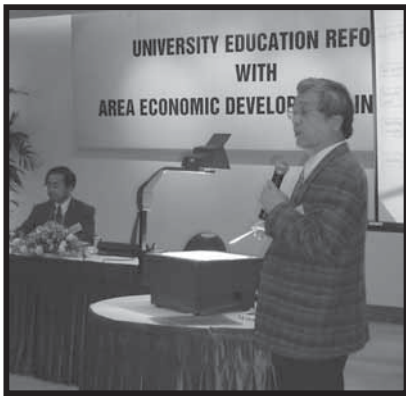
日本は、1990年代から生涯学習の時代というふうに言われております。教育というと学校教育を考えがちですが、日本の場合には学校教育、地域教育と職業(仕事)教育ということで三つに大きく分かれています。学校教育のことは皆様もおわかりですので詳しく説明しませんが、地域教育と職場の教育について少し説明したいと思います。日本では、地域の教育ということで公民館という名前の教育施設があります。ここには学校の先生と同じように専門の教育職員が配属されています。主に学ぶことは、自分の生活のこと、

業訓練の特徴でもあります。日本の経済発展を考えていく上で企業の中での教育は大変大

きな意味があります。農民の場合の教育は、この職業教育と地域教育が重なって教育が行われております。このように、三つの分野で教育が行われていることをご理解願いたいと思います。これらの三つの分野を統合していく、または調整していくのが生涯学習という考え方です。

この生涯学習という考え方の中で大学が果たす役割が大変大きいのです。日本では半分近くの青年がすでに大学に進学しています。そういう状況において、社会人がもう一度大学で学びたい、あるいは、大学をでていないひとが大学で学びたいという動きが大変大きくなってきています。大学は青年を教えるだけではなく、社会人を教える場にするために努力しています。特に大学が社会人の教育を進める場合に、大学の施設のみならず地域にでかけていく 企業の人たちと一緒に学んでいく、こうしたことが、大学改革の大変大きなポイントになっています。このような考え方を実践するにあたっては、地方の大学がもっとも適していると私は思っています。私の後に矢野先生が報告されますが、詳しい中身はその報告の中で触れられます。また農業の関係では岩元報告で詳しく紹介されます。またハンディキャップをもつ障害者の教育についての報告もあります。さらには、地域から報告も予定しています。鹿児島で最も大きな国際交流団体、多分日本では一番大きいと思いますが、NGOで大変活躍しているカラモジアの実践活動についての報告が予定されています。このように大学が地域や職場をつなげていこうとする様々な動きを詳しく報告してもらいます。





本報告におきましては、具体的に数値をみながら日本の生涯学習の説明をしたいと思います。この表は2000年の日本の学習人口を示しています。教育委員会つまり

文部省の行う教育講座がありますが、これには1700万人くらいが参加しています。日本の人口を1億2000万人とすれば、約14%が参加していることとなります。そのほかに文部省が対象とする講座以外の講座があります。これらの講座に1000万人以上が参加しているが、その参加者のうち、民間講座に300万人、大学に75万人、また通信(これは放送、郵便などの様々な方法によるものがある)に26万人が参加している。そのほかにも学習のための職業訓練施設があります。学校以外にも教育講座や教育施設がいかに多いかがわかります。ところがこれらの中には、企業内教育すなわち労働組合などによる教育は含まれていません。多分企業内教育、とりわけ労働組合が行う教育は、一般行政がやっている教育の数くらいあると思います。大変広範にわたって教育が行われているのがわかります。最近の企業内教育の新しい特徴として、社長も労働者もともに学ぶという考え方が運動として起きていることが挙げられます。その経営者団体は、中小企業家同友会というものです。日本の中小企業界においては、労働者も経営者も一緒になって考えていこうという動きが現れています。この経営者団体は約4万団体があります。最近日本でも経営がうまくいかずに倒産する会社が増えています。会社が倒産すると労働者の働く場所がなくなります。でも労働組合の人々が自ら自分たちの会社を再建しようとする中で、労働組合という新しい動きが生まれつつあります。今までの企業内教育、労働組合教育と全くちがった新しい教育、それは「自分の会社は自分で守っていこうとする教育」、つまり、これが私どもの言う「自立」という言葉です。

このように日本の教育に関しては新しい動きが見られつつあります。でもまだ日本社会全体がそうなっているわけではありません。日本がこれから発展していくためには、生涯学習という考え方のもと、自立という方向で日本を発展させていかねばならないと思います。その中心をまさに大学が担っていくのです。大学こそがその中心を担っていく

と考えています。これまで大学は、高度に専門化して分業化した教育機関を目指してきました。ところが、これは20世紀の考え方であります。21世紀は専門化、高度化ではなく、生涯学習により一人ひとりが自ら自立する、あるいは地域が自立する、民族が自立していく道をさぐるべきであります。そういう方向が今後の大学のあり方だと思っています。今日の話は、ベトナム語でもまとめているのでぜひ参考にしてもらえばうれしいと思います。以上で報告を終わりたいと思います。

#### 《第1報告 終了》

秋山: どうもありがとうございました。午後にも討論時間がありますが、ぜひここで確認しておきたいこと、あるいは質問があれば、2, 3点お受けいたします。ないようですので、早速第2報告に移らせて頂きます。

鹿児島大学工学部の矢野先生に第2報告をお願いします。矢野先生は現在鹿児島大学の副学長でいらっしゃいます。

#### 【第2報告】

## 2. 鹿児島における大学改革の特徴

### — 地域づくりとベンチャービジネス —

鹿児島大学副学長 矢野 利明

今日は三つの話題を用意しています。一つは鹿児島大学の紹介をしたいと思います。それから日本の大学改革、とりわけ鹿児島大学の改革について述べた後、最後に地域貢献とベンチャービジネスについて説明します。(以下、スライドを用いて説明)



これは鹿児島大学のある場所です。日本の首都は東京ですが、鹿児島大学は日本の南の九州というところにあります。東京から鹿児島までは飛行機で90分かかります。こちらが鹿児島県です。

私たちの大学は鹿児島県のほぼ真中にあります。私たちの

大学の前には桜島という火山があります。これが私たちの鹿児島大学です(地図)。この地図から農学部、工学部、理学部、法文学部、教育学部が確認できます。

私たちの大学の背後には、火山の桜島がありますが、この桜島は、時々爆発します。月に一回以上の頻度です。その時に巻き起こる噴煙は3000m以上の上空にまであがります。



風が大学にむかって吹きますと灰がキャンパスにも降ります。この写真は火山が爆発した夜の風景ですが、灰が上空に巻き上げられて静電気がおきます。それが雷を発生して光を発している光景です。また、

これは桜島の灰が100km以上も流された写真ですが、人工衛星からとったものです。

私達の大学はこういった環境のもとにあります。次は、私たちの大学に設けている教育のコースについてです。4年制の学部コースのほかに、2年制の修士課程、そして3年制の博士課程に分かれます。学部には、教育学部、医学部(但し、保健学科のみ)、法文学部、理学部、工学部、農学部、水産学部が置かれています。それ以外に6年間の学部コースが設けられており、医学部、歯学部、獣医学科があり、その専門には4年制の博士課程が設けられています。

次は、鹿児島大学の学生数です。学部には9,584名の学生が在学しています。最も学生数が多いのは工学部ですが、1学年の全学数1,980人のうち、455人が工学部に在籍しています。一方、大学院生の数は、1,635人であり、修士課程に関しても大学院生が最も多いのが理工学部(216名)であります。次は留学生の数です。留学生は、学部生、大学院生、研究生として全学で352名在学しております。留学生を国別に見ると、最も留学生数が多いのが中国、2番目がインドネシア、3番目が韓国、4番目がミャンマー、5番目がマレーシアという順ですが、ベトナムは6番目に留学生の多い国となっております。いずれにせよ、ご覧のとおり、アジアからの留学生が最も多いです。

これは鹿児島大学の学術交流協定校のリストです。最も協定校の多い国は中国であり、次に韓国、オーストラリア、ベトナムという順となっております。ベトナムについては、ハノイ農業大学、ハノイ貿易大学が学術交流協定校となっております。

次に日本の大学、とりわけ鹿児島大学の改革について簡単に申し上げます。

鹿児島大学の目標は4つありますが、教育、研究、社会貢献、国際交流がそれに該当します。従来大学の役割は教育と研究でした。私たちの大学はそれに社会貢献や国際交流を加えて4本の柱を挙げています。国立大学は、4月から国立大学ではなく独立行政法人となります。ご覧頂いているスライドはその後の鹿児島大学の方向づけを示しています。

＜教育と研究について＞

「教育の重視」、「教養教育の充実」、「教育と研究とのバランスのとれた総合大学」、「生涯教育への取組み」等々が挙げられます。

＜地域貢献への取組みについて＞

これについては、資料をご参照ください。

＜大学の管理運営に対する方向づけ＞

これもベトナム語に訳しているのをそれを参考にしてください。

＜社会貢献について＞

最後に鹿児島大学における社会貢献活動としてベンチャービジネスについて触れておきたいと思えます。

鹿児島大学には3つの施設がある。①地域共同研究センター、②京セラ経営学講座、③ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー、です。

時間がないので、各々の施設に関する説明が省かせていただきます。質問についても午後お答えすることにして第2報告はこれで終わりにさせていただきます。

《第2報告 終了》

秋山: どうも有難うございました。事実の確認のためのご質問をいくつかお受けしたいと思えます。本来の予定では11時から休憩時間ですが、始まりが遅かったためにこのまま継続して報告をお願いしたいと思えます。それでは第3報告です。

【第3報告】

### 3. 日本語と日本文学を

#### とおしての大学教育

教育学部長 中山 右尚

こんにちは。はじめておめにかかります。小学校、中学校、高等学校の教師を養成する学部であります教育学部の学部長を努めております中山です。私は昨日ベトナムにまいりました。夕べは水上人形劇を鑑賞しましたが大変面白く拝見しました。ベトナムにも演劇や文学を愛好する伝統があ

ると知り、とても嬉しく思いました。日本でも古代から文学や劇が好まれてきました。そういう二つの民族、国がより親しくお付き合いをすることが大切だと昨日の水上人形劇を見たあと強く思いました。

それでは、私の大学にかかわる仕事をご紹介したいと思います。

日本では日本の国民を対象に行う日本語の教育を「国語」という呼び名で呼んでおります。私はその国語科の教員で



あります。国語の教科書には日本文学が多く含まれています。それは何故かという、文学の表現の中には日本語の大変優れた表現が多いからです。子どもたちが日本語を大事にしたい、日本という文化や民族を大事にしたいという気持ちは文学の教育を通して行うから

だと思います。

教科書の中には古い時代の物語と現代の小説が登場します。日本では古くから、人間が喜んだり、悲しんだりしたときに、歌詞をつくりました。それを和歌といいますが、明治時代からは短歌といっています。

高等学校になると日本の伝統的な劇も学ぶこととなります。高等学校の教科書にはそういう劇に関する文章が含まれております。さらに文学には評論という分野があります。特に高等学校には評論家たちの文書が含まれています。従って、教育学部の国語で学ぶ学生諸君は、日本文学を古い時代から現在の文学まで幅広く学ぶこととなります。留学生の皆さんにも比較的分かりやすい作品から勉強を重ねて、古典の分野まで学習し勉強する人がいます。7、8年前ですが、ハノイ貿易大学の学生も10ヶ月間勉強したことがあります。大変日本語が上手だったので強い印象が残っております。その後、ベトナムからの学生はおりません。現在は中国、韓国からの留学生がおります。

これから私の専門的な話に移りますが、昨日劇を観ながら日本にも江戸時代に大変盛んな人形劇があったことを思い出しました。日本でも人形劇が、今でも大阪や東京の劇場で「文楽」という名称で上演されています。江戸時代には、17世紀から18世紀にかけて日本の最も有名な劇作家で近松門左衛門という脚本家がありました。私は、近松門左衛門などが活躍した江戸時代の文学を専門に研究しています。江戸時代は、教育に非常に熱心な時代でした。特に儒教・仏教・神道など日本古来の三つの宗教による思想と、それらが互いに融合した思想などが「道徳」として存在していました。この

道徳を教えるために文学はよく使われていました。道徳を教えるのはあまり面白くない気がしますが、江戸時代の文芸は「滑稽」を交え、ストーリーの面白さなどを加えて道徳を盛り込みます。特に滑稽を交えることを得意としました。したがって、江戸時代の文学は教訓・道徳と滑稽の時代といってもいいかもしれません。私はその江戸時代の文学の中でさらに専門を細かくいうと、滑稽な絵本で風刺などを含んでいる黄表紙という滑稽文学が専門です。しかし、江戸時代全体についても、あるいは、明治の文学についても講義しています。



さて、江戸時代が終わり、19世紀の1868年から明治という時代がはじまります。明治になると日本人は、西洋・西欧の思想や文学、文学理論を盛んに学びました。そして、夏目漱石や芥川龍之介、志賀直哉など多くの小説家が活動しました。伝統的な和歌も俳句も新しい時代の文学として新しい感動を描こうと努力しつづけました。これらの文学について大まかにその特色をいうと、明治以降の日本文学は、個人と社会、個人と家庭、個人と政治といった関係をよくみつめながら自分の生き方を書く文学であるといえます。したがって悩みの多い文学でもあるわけですが、またそれだけに生きる喜びを見出そうという文学でもあります。明治以降の文学はそういう特色をもっているのです。

ところで文学を考えると、文学にはその国の特徴がもつとも総合的に現れるのではないかと思います。ベトナムと日本が総合的に理解しあうためには、文学を読みあう、学びあうことが大変重要であります。鹿児島大学は、ベトナムの学生が日本文学を学ぶときには、出来るかぎり協力や支援を行いたいと思います。

### 《第三報告終了》

秋山：どうも有難うございました。この場で確認したいことがあれば質問してください。

### —第3報告に対する質問—

フワ：日本研究センターに勤めているフワです。日本文化を勉強する時に文学に引かれます。日本における



日本文学教育について質問をしたいです。日本文学には、小説、詩、劇、文学理論など様々なジャンルがあり、時代別にも古代文学、現代文学に分かれています。学校教育ではどのように体系的に教えているのでしょうか。もうちょっと詳しく説明して頂きたいです。中山先生のお話では江戸時代の文学を重視しているということですが、平安時代の文学も面白いと思っています。また、ベトナム文学との比較も可能ならばお願いしたいです。

**中山:**小学校から高等学校までの日本文学の教育についてお答えします。小学校、中学校、高等学校の国語の時間には、日本文学に対する比重がだんだん少なくなってきています。日本文学を研究している我々にとってはさびしいものです。しかし、きちんと古代から現代までの文学を教えるべきだという研究者もいます。とはいえ、文学の比重がだんだんと少なくなっているのが実情です。国語教育には、話す力、書く力、読む力が総合的に求められているために、文学に偏らないようにという考え方があるからです。しかしながら、国語は、日本人としての自覚を育む役割をしますので、そういう意味においても文学は必要だと思えます。

大学の国語教育では、古代から現代までの文学を学べるシステムになっています。ところが、平安時代の文学 例えば、源氏物語、伊勢物語などを専門にしている研究者は教育学部にはいません。しかし、法文学部には、源氏物語を研究している人がいます。平安時代の文学をテーマとして鹿児島大学に留学する場合は、スタッフをよく調べて、学びたい先生のところで学習することをお勧めします。その時にはどんなスタッフがいるのかかスタッフへの橋渡しなどのお手伝いをいたします。

**秋山:**色々質問があろうかと思いますが、ここで10分間の休憩をとりたいと思います。11時35分に再開します。

【休憩時間】



歓談の様子

**秋山:**それではシンポジウムを再開します。第4報告は岩元さんをお願いします。岩元さんはNPO法人「鹿児島有機農業協会」の理事長でもあります。

【第4報告】

## 4. 地域の農業発展と大学

—環境保全農業のとりくみを通して—

農学部 岩元 泉

農学部の岩元です。農業経済の分野で仕事をしています。農業経済分野では色々と地域に密着した仕事も行っています。その中でも環境農業を通して地域と大学が交流する話題を次ぎの四つにまとめて報告します。



農学部レベルで環境保全型農業に実践的に取り組んでいる事例です。ここでいう実践的という意味は、実用化されているという意味です。

その一つはアイガモ農法ですが、詳しくは省略しますが、鴨をつかって農薬のいらぬ農業を営むことをいいます。もう一つは土着菌に関する研究ですが、土着菌とは微生物とりわけ地域固有の微生物を培養して家畜の餌として使う技術を開発する研究のことです。農民の間には広がっています。

次の全学合同研究プロジェクトについて紹介します。1997年から2000年にかけてプロジェクトが遂行されました。テーマはご覧のとおり、「大地・食・人間の健康を保全する環境革命への試行」というものです。地域的な課題を取り上げた上で、大学内外の研究者160名が参加しています。このプロジェクトは三つの分野に分かれています(資料参照)。なお、これはすでに刊行された報告書の写真です。

一つ目のグループは「大地の健康と持続的食料生産」というテーマをもって研究を行ってきました。研究過程の中で



ワークショップなどを開き研究成果を社会に還元できるよう努めてきました。二つ目のグループは、「食べ物と健康」というテーマに沿った研究を行ってきました。三番目のグループは「地域環境と人間生活」というテーマをもって研究してきましたが、地下水の問題、教育などのテーマが中心でありました。これもシンポジウムなどで一定の成果を社会に還元したといえます。

次は現在やっている「網掛川流域環境共生プログラム」について紹介します。このプロジェクトは2001年から2003年まで、市民や企業関係者を含めた20数名の研究者グループでやっています。このプロジェクトは、参加者の性格からみて産官学民による共同プロジェクトであるといえます。

鹿児島県の真中に小さい川がありますが、網掛川といいます。この川の上流に環境保全型農業を実践するための研究を行っていますが、上流だけではなく下流にかけての流域全体が研究の対象地域となっているのが特徴であります。研究内容としては、「学校教育と環境保全」、「地域農産物を地域に流通させるための活動(地産地消)」あるいは、「農村と都市を交流させる取組み」などを積極的に行っており、山間地の水田でアイガモ農法を実践してみるような取り組みもしています。

その活動の一環としては、「子供達が参加してアイガモを観察する」、「収穫にも学生が参加している」などの環境教育が行われます。また、溜池をつくって環境変化の推移を観察するほか、土壌や水質などを科学的に分析するなどの活動も行っています。これらの成果が実り、環境保全型農業は上流から下流へとだんだん拡大しつつあります。

私は、これらの活動以外にも有機農産物認証を行っています。必ずしも大学と直接かかわりをもってはいませんが、NPO法人「鹿児島県有機農業協会」を設立し、2000年から有機農産物認証に取り組んできました。同協会には有機農産物に関して第三者認証を行っています。その協会の理事長を務めています。

さらに、現在活動をしている研究には矢野先生のお話にも触れられた「地域共同研究センター」において鹿児島産官学交流をめざした「食の安心・安全部会」発足し、消費者がもつ食の安全問題に対応しております。私どもの有機農業協会もこの部会に参加しております。簡単ながら第4報告を終わらせて頂きます。

#### 《第4報告 終了》

秋山: どうも有難うございました。第5報告はカラモジア財団の肥後さんをお願いします。

#### 【第5報告】

### 5. 鹿児島国際交流事業と大学

—カラモジア財団の実践を通して—

カラモジア財団 理事長 肥後 隆志

肥後と申します。まず私どものカラモジア財団という名称の有する意味から説明したいと思います。さつまいものことを鹿児島ではカライモ(唐芋)といいます。そのカライモの「カラ」とアジアの「ジア」を合体したのが「カラモジア」となりました。カ



ライモは薩摩芋とも言われますが、鹿児島県がカライモの生産量が最も多い県であることからつけた別名です。300年ほど前、前田利右衛門という料理人がいましたが、この人がはじめて薩摩芋を日本に広めました。当時鹿児島をおさめていた島津藩に属していましたが、私の先祖にあたります。私の息子が12代目です。

この薩摩芋を使って、当時飢餓状態にあった島津藩の民を救ったと歴史の教科書には記されています。その後薩摩芋は、過去300年間にわたって日本全土にひろまりました。

カラモジアというNGOは、日本国内に留学している北米、アジアそして世界中の留学生をホームステイさせている団体です。留学生の約半数は中国、ベトナムなどアジアを中心とした留学生であり、東京、大阪方面からもたくさんきています。NGOカラモジアは、4万人くらいの受入家庭を擁していますが、この数でいえば日本で一番大きいNGOです。なお、受入家庭の8割が農家であり、農家にホームステイして衣食住をともにします。そして、仕事も一緒にやっています。そうした中で自ずと生まれるのが人的交流、心の交流です。このような交流は、ODAでは期待できないものであり、カラモジアならではの成果であると自負しています。

これまで卒業生を3500人位輩出してきました。交流の際には、たくさん話題が登場します。中でも近代日本をつくりあげた西郷隆盛、大久保などに関する話題がホームステイ中で話し合われます。こうした交流がきっかけとなって結婚したり、あるいは、お互いの結婚式に出席するなど交流、そしてビジネスなど色々なことが生まれています。このような交流事業の中には、カラモジアがラオス、カンボジアで行った特別な活動もあります。ミャンマーで長年にわたつ



て行っ  
た活動  
では、  
シャン  
シュと  
いう小  
さい村

に入って鹿児島大学と共同で環境保全型農業の普及と人材育成、そして、文化交流、技術指導が行われました。鹿児島大学の学生もミャンマーにいきましたが、逆にミャンマーの学生を鹿児島に呼んだこともあります。さらにミャンマーに学校をつくる運動もはじめました。鹿児島大学をはじめリタイアした農業技術者をミャンマーに派遣しました。今後、私どもはベトナムにも足を運び、少数民族、山岳民族と深い交流をしたいと思っています。当初、ミャンマーに活動の場を求めた目的は、麻葉の原料となるケシの撲滅にありました。それと同時にケシ栽培の代わりに、転作作物の導入に力を注ぎ、農家所得の向上をはかりました。

同様な活動をベトナムでもできたら幸いです。たとえば、ベトナムに関しても技術指導、人材育成などを行いたいと思います。もし、ベトナムから留学生、研修生が鹿児島に来たなら、カラモジアが既に持っている大きな施設を利用して積極的に受け入れる準備は来ています。鹿児島県と外務省が建てた大きな施設があります。約100名を収容できるホテルなみの施設です。いずれにせよ、ベトナムとカラモジアとの間に交流

ができることを期待しながら、これで終わりにさせていただきます。



秋山: ご質問、確認したい点などがあればお願いします。ないようですので、これより昼食休憩にはいらさせていただきます。1時30分まで休憩した後に、シンポジウムを再開いたします。



立食形式の昼食会

## 《午後の部》

秋山: それでは午後のシンポを再開します

### 【第6 報告】

## 6. 障害児教育と大学

教育学部 内田 芳夫

内田と申します。4枚のスライドを利用して報告します。まず障害児教育の歴史について整理してみました。すでに日本では100年以上の障害児教育の歴史があります。そのなかでも最近の動きについて述べます。1979年には、どんなに重い障害を抱えている子どもでも教育を受ける権利が与えられました。



1981年は、国際障害者年がスタートし、国際的な取組みが充実しはじめた年です。2001年には、環境との相互作用という視点が重視されるようになり、従来の医療中心の障害概念から医療-社会モデルへと障害概念が変化しました。2003年(今年)から Inclusion(包括)という観点から特別支援教育(Special Needs Education)という枠組みづくりへのアプローチが開始されました。その特別支援教育とは、これまでの障害に加えて新たにLD(学習障害)、ADHD(注意欠陥多動性障害)、高機能自閉症などが障害児教育の対象となりました。

その出現率は、小学校や中学校をあわせて6.3%とされています。従って、日本では通常1クラス当たり40人の児童・生徒がいますので、1クラスにこの種の障害をもつ児童・生徒が2人は含まれている計算になります。現在、通常クラスに在籍している学習障害児などの支援のあり方が検討されているところです。

次に、鹿児島大学教育学部の障害児教育教員養成のあゆみです。本学における養護学校教育養成課程は30年前(1973年)に設けられました。1980には「附属養護学校」が設置され、研究と教育両面において大学とつながりました。現在の教育学部長の中山先生も養護学校校長をお勤めになられました。1994年に大学院教育がスタートしましたが、ご覧の通りに、カリキュラムは4つの領域(「障害児教育学」、「障害児心理学」、「障害児保健学」、「障害児病理学」)で構成されています。

一方、障害児教育課程では附属養護学校との共同の取組みもあって、就学前の相談会なども実施しています。私たちの卒業生の就職先としては、障害児諸学校の教員、障害児教育施設指導員、病院の心理職やスピーチセラピストなどがあります。

次は、地域との連携についてです。一つ目に、現職教員に関する再教育を実施していることです。主に夏休みに行っています。二つ目に、障害児に関する就学相談や教育相談などのサービスも行っています。三つ目に、いじめや不登校児に対する支援にもかかわっています。ちなみに日本で今、不登校児は、13万人を超えています。四つ目に、鹿児島県は離島・僻地が多いので、遠い島だと鹿児島市から300kmも離れた島まで巡回指導に出かけることがあります。また、卒業後の労働保障として共同作業所(これは障害者仲間が中心となって働く作業所)を作りその運営に参画しています。簡単でしたが、障害児教育について述べました。

私ごとですが、ベトナムのベトちゃん・ドクちゃんを支援する会に参加し、また、数年前にはホーチミンの幼児師範大学で、障害児教育の教員養成にかかわりました。2004年3月にもJICAの要請により再び訪れる予定です。今後ともベトナムの障害児教育を手伝わせて頂きたいと思っております。ご静聴ありがとうございました。



#### 《第6報告終了》

秋山:ご報告ありがとうございました。質問したい点、あるいは、確認したい点がありましたら自由にどうぞ。

—第6報告に対する質問—

ラン:日本研究センターのランです。素晴らしい報告を聞かせていただきました。質問をしたいのですが、日本では障害

児のための教育が実施されています。報告の中には、2003年から特別支援教育という新しいシステムができたようですが、その特別支援教育の実施に



よって、これまでの特別学級はなくなることを意味しているのでしょうか。以前は障害のある子どもは特別な学校で勉強することでしたが、今は普通の子供と一緒に勉強することになっているのでしょうか。一緒になって勉強するなら特別な支援はどのように行われているのでしょうか。

内田:例えば、盲学校や聾学校、その他の養護学校も維持されます。特別支援教育の主な目的は、これまで、通常学級であまりサポートされなかった子どもたち、すなわち、LDやADHD、高機能自閉症児などの軽度発達障害児にフォーカスをあてて支援しようということ、従来の教育に加えてサポートしようというプランです。同時にバリアをなくするために可能な限りインクルージョンを進め、通常学級にコーディネーターを派遣し、分離教育のバリアを少なくしようという取組みです。

秋山:その他の質問はありませんか。多少時間に余裕があるので遠慮せずにどうぞ。

矢野:インクルージョンの話ですが、インクルージョンからもたらされる問題は、障害児に起こるのか、それともほかの生徒に起こるのかについてお聞きしたい。

内田:人や設備も含めた十分な教育的環境がないままに、インクルージョンが形式的に導入されると、両者に問題が生じます。子どもたちは、それなりの環境を準備しますと、相互のコミュニケーションが子どものレベルで豊かに展開し、これといった問題は発生しません。むしろ大人になってから、良き思い出となり、弱者と共生する社会や地域づくりの原動力になると考えます。障害児と一緒に自分の子どもの発達に不利益をもたらすのではないかと大人側が否定的な態度を取ることが問題になっています。

矢野:我々社会は多様な人がいます。そういった中で、インクルージョン教育をするべきではないのでしょうか。小さいときにハンディのある子どもと触れ合って、社会で普通に触れ合えるのではないかと。ところで、インクルージョン教育は小学校、中学校まであるのですか。

内田:特別支援教育との絡みで本格的にインクルージョン教育が広がり深まっていくのはこれからですが、高校も含めて高学年になるにつれてインクルージョン教育は容易になると思います。小学校や中学校だけでなく、一部ですが高校段階で実際に展開されています。

ラン:障害が軽い子どもは、インクルージョンという形で普通の子供と一緒に学習することが可能ですか。自閉症などの病気を抱えている子供は、普通の子供と同じように社会の人と交流できないと思いますが、そういう子どもはどのようにインクルージョンという形で支援を受けるのでしょうか。



**内田:** 自閉症児は社会的接触が苦手ですから、苦手なところを特別にサポートするのも大事でしょう。併せて、苦手な社会的スキルに配慮して、社会経験を豊かに積む課題もあります。大切なことは分離するのではなく、健常者が自閉症児のコミュニケーションの特徴をひとつの文化として理解することによって、他者との交流が可能になってきます。その意味で、バイリンガル教育と自閉症児の教育は基本的に通じているのではないのでしょうか。

**秋山:** もっと質問があろうかと思いますが時間が限られていますので討論時間に回したいと思います。これをもって日本側の報告が終わりました。これよりはベトナム側の報告に移らせて頂きます。当初、二つの報告を予定していましたが、一人の報告者の都合がつかず資料のみの配布になってしまいました。それでは「日本留学とハノイ貿易大学の学生の関心」というテーマで報告をお聞きください。

## 【第 7 報告】

## 7. 日本留学と貿易大学の学生の関心

貿易大学 助教授・博士 グエン・ティ・クイ



クイです。貿易大学の教務課の課長として報告いたします。報告に先立ち、今日は鹿児島大学からお招き頂いた事についてお礼を申し上げます。なお、ベトナム滞在中に皆さんの健康をお祈ります。

一週間前に貿易大学から報告を命じられました。私の報告内容は概ね二つにわかれます。一つは、「貿易大学の学生の日本留学の形」であり、二つは、「貿易大学の学生の国際交流拡大の可能性及び幾つかの提案」についてです。

### 1. 貿易大学の学生の日本留学の形

現在、日本文部科学省が毎年定期的に規模大きく国費奨学金留学生を募集しています。文部科学省の奨学金は、一番多くの学生が興味のある奨学金です。ベトナム人学生のための文部科学省奨学金の種類は、高等専門学校留学、学部留学、大学院留学、日本語・日本文化研修留学、日本語教員研修留学、アジア青年奨学金、指導者養成プログラムなどです。

まず、学部留学奨学金に関しては、貿易大学生の応募者は

殆ど 1 年生を終えた学生です。彼らは、優秀な学生です。文部科学省奨学金は、多くの大学生の夢であります。しかし、数が限られているので、この奨学金をもらえる学生は多くありません。貿易大学では、毎年平均この奨学金に応募し、合格できる学生はわずか二人から三人です。だが、彼らは、日本に行った後、有名な大学に入学できます。

貿易大学の 3 年生のためのもう一つの良い機会は、一年間の日本語・



日本文化研修留学プログラムです。在ベトナムの大使館で毎年行われる選抜試験では、貿易大学の学生は、いつも高い地位を占めています。このプログラムは、意義深い文化・教育交流です。在日中、大学の講義、大学外の旅、出会などは、彼らの知識を豊富させます。それを通じて、彼らは日本の文化を見につけることができるだけでなく、日本人にベトナムのことをより理解してもらえることができます。一年間の日本留学を終えて、貿易大学に戻り、勉強を続けると同時に、ベトナム-日本の友好交流のかけ橋として積極的に色々な活動に参加し続けています。

日本政府の奨学金が他にも幾つありますが、それは、ほとんど大学院のためのプログラムです。この数年、私費留学を通じて日本の教育に接する貿易大学生の数は増加しています。しかし、その努力にもかかわらず、ベトナム人の大学生は簡単に留学できないといえます。だから、私費留学にまだ問題点があると言えます。

まず、日本の大学の入学試験の受験についての問題点です。書類選考だけ行う大学もありますが、ほとんどの大学は直接日本に行って受験することが求められます。しかし、2001年から日本の国際教育協会はベトナムにおいて留学試験を行うことになるので、貿易大学の学生の悩みはなくなりました。受験費は相当に高いにもかかわらず、多くの学生が受験しました。貿易大学の学生は、より多くの日本の大学がこの試験を入学選考の一環として採用するように期待しています。

貿易大学には、日本語科の学生の他には、英語を勉強している学生が大部分を占めています。英語学習の大学生が、日本において勉強、研修するチャンスは少ないです。彼らは、たいいてい日本語学校で勉強することになります。それから、

日本語能力を身につけてから、大学または高等専門学校に受験します。一年間日本語学校に留学するための費用は、次の通りです。

- 入学費:8万円
- 学費:55万円
- 設備利用費:5万円
- 教材費:4万円
- 合計:172万円(6000ドル)

他にも、最初ベトナムで日本語教育、それから日本で専門教育を行うという形で各大学間の協力を望んでいます。

## 2. 貿易大学の学生の国際交流拡大の可能性及び幾つかの提案

ベトナムにおける大学教育改革プログラムの一つの重要な内容は経済統合を目指すという内容です。日本は工業発展国であり、ベトナムが学ぶべき経験を多く持っています。日本との交流、関係を広げていくことは、必要ですし、貿易大学の学生を含むベトナムの若者の願望でもあります。

今年11月に貿易大学の学長は、オーストラリアのラトベ大学と2+2のパターンの教育協力協定を結びました。この協定によりますと、貿易大学の学生は、前半の2年間ベトナムで、後半の2年間をオーストラリアで勉強してから、オーストラリア側によって発行される卒業証書をもらえることとなります。2年間のオーストラリア留学費用は4500万ドル(つまりおよそ3万ドル)にのぼりますから、学生も保護者も悩まなければならなりません。

私たちが知っている限り、ハノイ工科大学は日本の慶応大学と、情報技術者養成協定を結んでおります。このプログラムのパターンは3-2であります。

以上から、鹿児島大学と貿易大学に対して、提案を提出させていただきたいと思います。

1-1 慶応大学-ハノイ工科大学の協定8と同じパターン、つまり、3-2パターン。

具体的には、

- +日本語で学習する
- +最初の1年間ベトナムで日本語の教育をうける。  
(日本語を教えることは、貿易大学が負担できる。)
- +次の2年間貿易大学で専門教育を受ける。
- +最後の2年間鹿児島大学で専門教育を受ける。
- +卒業証明書は、日本文部科学省が発行したものである。
- +日本留学中の生活費、学費は鹿児島大学が負担する。  
ただし、交通費は学生が負担する。

1-2 貿易大学とラトベ大学との協定の2-2パターン、つま

り、

- +英語で学習する。
- +前半の2年間貿易大学でベトナムで教育を受ける。
- +後半の2年間鹿児島大学で英語で教育を受ける。
- +卒業証明書は、日本文部科学省が発行したものである。
- +日本留学中の生活費、学費は、鹿児島大学が50%支援する。

ただし、交通費は学生が負担する。

### 1-3 留学生交流のパターン

交換留学生の人数及び学費などは両大学が相談した上で決定する。

以上、日本留学したい学生の意見に基づく貿易大学の教務課の意見を言わせていただきました。貿易大学の学生の夢が早く実現できるように、貴校に検討していただきたいと、思います。よろしくお願いします。

## 《第7報告 終了》

### —第7報告に対する質問—

神田: 昨年、鹿児島大学は、ハノイ貿易大学と国際交流協定を結びました。報告ではその認識がないようですが。現在、ハノイ貿易大学から留学生が既に鹿児島大学に国費留学生としてきています。彼は、すでに大学院に合格しているので2年半は最低鹿児島大学で生活できるようになっています。授業料は免除であり、しかも生活費は毎月18万円が支払われます。そういう事実が報告にないということは大変残念のように思えます。貿易大学の学生は、鹿児島大学にきているのです。

報告のなかで文部科学省が発行する卒業証書とは存在しません。日本では、卒業証書は各大学が発行しています。慶応大学の話は事実と違います。

貿易大学との交流協定の中身についていうと、交換留学生に対しては学費を免除する仕組みとなっています。また、鹿児島大学が文部科学省に奨学金を申請することにより留学生の生活費確保に心がけています。いまのところ留学生の数が少ないので文部科学省から奨学金が比較的容易です。もちろん留学生数が増えると必ず生活費が保証されるとは限りなくなります。

クイ: ご意見ありがとうございます。私は学部レベルの学生の話をしているので一部誤解を招いたようです。今一人の





大学院生は鹿児島大学に留学していることは知っています。もう一つ、卒業証明書については多分言葉つかいがまちがっていたと思います。ベトナムでは卒業証書に学長がサインするものの、あくまでもベトナム政府、すなわち教育訓練省が発行するものとして取り扱われています。

そこで日本の文部科学省が発行したとってしまいました。

**神田:**貿易大学の学部生も一人、鹿児島大学に留学しています。今年11月から来ています。

**クイ:**1年間の短期留学のことですね。

**矢野:**さきほどの学術交流協定を結んでいる大学の紹介がありました。このプログラムによって協定を結んだ大学からの留学生については授業料を免除しております。交換とはいえ、ベトナムから鹿児島大学に留学する学生が多く、鹿児島からベトナムの大学に留学する人がいなくても授業料免除は認めています。

次は、日本の留学制度と日本の文部科学省奨学金の取得仕方について触れておきたいと思います。これは、まず大学によってルールが違うことは分かって頂きたい。そこで鹿児島大学のルールを説明しますが、優先順位を決めるにあたって、①協定校からの学生を優先して教官が推薦します。②専門分野の先生を通じて大学の学部に申請をします。③各学部から推薦された留学生を全学で選考します。④世界中から推薦された留学生に順位をつけます。ここから先は複雑で説明しづらいのですが、鹿児島大学で文科省の奨学金をもらう優先順位は、まず交流協定校であること、鹿児島大学には8つの学部があるので、全ての学部からだされた留学生について選考します。その年によって学部の順番が決まっています。鹿児島大学全体で、特定の国からの学生が多くならないように、各国から留学生が平等に受けられるように心がけています。もちろん推薦された留学生が1人の場合は非常に有利です。

中国からの推薦が非常に多いです。とはいっても鹿児島大学から文部科学省奨学金支給対象は1人です。2番目の推薦の多いのは、マレーシア、インドネシア、韓国という順番ですが、そういう国もひとりずつ選ばれます。アフリカ、ベトナムも有利です。そういうふうにして鹿児島大学の国費留学生が決まります。1年間に10名前後が文部科学省の奨学金を授与されます。公明正大な選考を行っています。たとえば工学部では順位は協定校でない場合がしばしばあります。

いずれにせよ、詳しいことは当該学部の先生に相談されたほうがいいでしょう。

文部科学奨学生は、入学金、授業料は免除される上、1ヶ月に18万円の生活費が支払われます。鹿児島大学は、国費留学生も私費留学生も受け入れています。私費留学生の場合も協定校の学生であれば生活費は確保されないものの、入学金と授業料は免除となります。ベトナムと鹿児島大学と留学生の交流をするならぜひ協定を結びたいと思います。

**クイ:**ご意見ありがとうございます。文部科学省奨学金の数が増やすのは難しいのに、私費留学生が増えているという実態があります。鹿児島大学に一層の支援をお願い出来れば幸いです。

**秋山:**ご意見、討論が続きそうですが、休憩をとった後に継続して議論を行って頂きたい。学部生の話が中心でしたが、当初予定していた報告は大学院生の話も含まれていますので目をおしていただきたいと思います。それでは14:50まで休憩しましょう。

#### 【総合討論】

**秋山:**シンポジウムを再開いたします。これより残された1時間に有意義な討論が行われることを期待しています。さて日本側の報告が6つ、ベトナムの報告1つ、レポート1つがありましたが、これらの報告及びレポートに基づいて討論して頂きたい。どのテーマでも結構ですが、広範囲ですので、参加している報告者以外のほかの先生から感想などを伺いたいと思います。最初にハノイ外国語師範大学の先生に自由な感想なり質問をいただければと思います。

**ロイ(ハノイ外国語師範大学教授):**ハノイ外国語師範大学は外国語の先生を養成することを目的に設立されました。外国語のうち、9カ国語について外国先生を養成しています。その中には日本語も含まれています。外国語の先生の養成以外にも、一般学生向けの外国語教育も行っています。その理由は、必ずしも外国語先生にならなくても、外国にでかけたときに外国語能力をいかにすることにあります。



海外の大学との協力関係は大事です。今日のシンポジウムを通して、そういう印象を強く受けました。これまで外国大学との協力関係を築いてきた私自身の経験を述べたいと思います。

まずベトナムにおける全ての大学は外国大学との協力を大切にしたいと思っています。日本とベトナムの関係は近年非常に活発になってきています。ベトナムの教育にとって日本との関係は非常に大事だと思います。

鹿児島大学との関係においては、次の3つの問題点を取り上げられます。1. 言葉の問題 2. 学費の問題 3. ビザの問題です。これら三つの問題のうち、1と2は難しいと思います。

まず言葉の壁の問題ですが、ほとんどの学生は英語を習っています。したがって、鹿児島大学に英語で教える講座があったら非常に助かります。ベトナムで一年間日本語を教えることはできます。しかし、1年習ってどうなるか疑問もっています。私自身5年間大学で英語をならいました。そして10年間英語の先生を勤めていますが、外国に出かけた際には大変困る状況を経験しています。日本語の場合、ベトナムで1年、あるいは日本で1年しか習っていないとすれば、人間関係、日常生活、学習など非常に困るのではないのでしょうか。鹿児島大学側が、いくらベトナムに興味をもって、なんとかしたいと思っても、ベトナム側の希望に応じることは難しいでしょう。

とはいっても、ベトナムの学生を何らかの形で助ける必要があります。その意味では、ベトナムの大学から多くの学生が鹿児島大学で勉強できる道を探さなければなりません。私は鹿児島大学に干渉する立場にはありませんし、ベトナム学生のために授業料を免除してほしいなどはありません。どういう形をもって連携できるのか、お互いに道をさがしましょう。

クイ先生からの提案は実際にできるのではないかと思います。我が大学も中国、オーストラリアの大学と連携をしました。その意味で鹿児島大学にお願いしたいのは、協力関係という形でお互いに協力していきたいと思っています。できれば多くの学生、大学院生が鹿児島にいけるようになってほしいです。

一部のコースは、ベトナムで教えられるようになったらいいのではないかと思います。ベトナムで教えられるコースのことであります。もちろんベトナムの物価が安いので学生は大変助かるのでしょうか。そうやっていけば、例えばテーマをもって鹿児島大学から派遣された先生がベトナムで研究し教えることは可能です。もちろんベトナムの給料なので高くはありませんが。

大学院に進学する場合、ベトナム国内で課程を設けて頂ければ学生も喜ぶでしょう。というのは社会人として在職しながら進学できる道が開かれるからです。大学院進学のチャンスがあれば、学びながら仕事が続けられるでしょ

う。ベトナムでも学費はかかりますが、なんとか払えるのでしよう。要するに、ベトナムで鹿児島大学の先生が教えることが最もいいと思います。これができたら鹿児島大学にとっても都合がいいと思われます。細かい話になりますが、講義室を提供したり、光熱費などベトナムが負担できる分については負担したいと思います。明日の訪問の時にまた詳しく話をしたいです。

**秋山:**有難うございます。今の意見について確認の質問などあったらどうぞ。特に質問がなければ、次に日本研究センターの方からのご意見なり感想を聞かせて頂きたい。

**ラン(日本研究センター):**私は日本研究センターの文化官として意見を述べます。本日のシンポジウムで紹介していただいたテーマ、とりわけ教育問題や障害児に対する教育環境の問題に関する話題はとても役立つものでありました。我々の研究のために貴重な情報でした。現在、私は研究者としてハノイ人文大学に勤めています。日本文化を担当しています。

学生交流問題について話したいと思っています。私は創価大学に留学したことがあります。毎年創価大学の東南アジア学生がハノイ大学を訪問して東洋学部の学生と交流しながら意見交換などをおこなっています。できれば将来、鹿児島大学の学生をハノイ大学の東洋学部の学生と交流させたいです。大変意味のあることだと思います。関心をもっている同じテーマを取り上げ、意見を交換したり、歌を歌ったり、ハノイ市内を歩いたり、将来鹿児島大学の学生とそういう交流ができることを期待します。研究や教育を結び付けて、有効に交流して発展させていきたいです。

**秋山:**それではご自由に討論して下さい。どなたからでも構いません。報告が広範囲に渡っていますので、どれについても構いません。

**矢野:**クイさんへの質問です。レポートの2頁目ですが、日本の国際教育協会に支払う受験費が相当かかるとありますがいくらくらいでしょうか。

**クイ:**私は受験費が高いと書きましたがベトナムの物価に照らして高いということです。だいたい65000ドン/1科目×3科目です。全部で約20万ドン、USドルで約15ドルです。



**矢野:**これは日本側が決めたのですか。

**クイ:**これからはフーさんが話します。彼は留学生担当で

すので詳しいと思います。

フー:ハノイ貿易大学国際関係学部のフーです。受験は毎年2回実施されますが、1回につき6万ドン程度です。ベトナム人にとってそれほど高くないと思います。

矢野:ハノイでの受験生数はどれくらいですか。

フー:今年6月のはじめには、わずか37名が受験しました。11月の2回目は70名が受験しました。ほかの国に比べて、中国と韓国の方から参加した学生は多いですが、ベトナムは相対的に少ないのが実状です。

矢野:ベトナムではハノイでしか受験できないのですか?

フー:ハノイとホーチミンの2ヶ所で実施しています。

矢野:鹿児島大学ではその試験を入学試験の科目として認めることを決めています。

フー:先ほど二回目の数がなぜ多いのか説明したいのですが、日本の試験には2年間かかり、最初は難しく試験を受けられません。そのため奨学金もらえるチャンスも少ないのです。6月の1回目では、3名が奨学金をもらうチャンスもできました。

矢野:日本語学校の授業料が72万ドンと記されていますね。当該日本語学校はハノイにある学校ですか、それとも日本にある日本語学校ですか。

フー:ベトナムの学生が日本に渡って受験する場合の金額ですので誤解のないようにお願いします。ベトナムの日本語学校はもっと安いです。

秋山:手続きなど細かい質問がありました。そのほかに報告内容についての補足説明などがあつたぜひお願いします。矢野先生は時間の余裕がなく十分な報告ができなかったと思いますが、後半の部分の補足をしていただけますか。

矢野:それでは、時間がなくて省略したところをもう少し説明したいと思います。鹿児島大学にはベンチャービジネスに関連する三つの施設があります。「地域共同研究センター」、「京セラマネジメントコース」、「ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー」です。



地域共同研究センターは1992年に設立されました。この施設は研究と教育を共同で行う施設であります。それから

プライベート会社とのプロジェクト研究をプロモートする研究も行っています。より先進的な技術開発のために、外国研究者との共同研究も行っています。このほかにも地域の中小企のセミナー、トレーニングなども行っています。鹿児島大学の先生方がコンサルを行うこともあります。以上のような諸々の活動が地域共同研究センターを中心に行われています。

「京セラマネジメントコース」は、2000年に設置されました。京セラミクという会社がありますが、その企業から寄付を頂きました。ICチップ、携帯電話などのメーカーであります。稲盛という人が創立者であります。彼は鹿児島大学工学部の出身であります。当該コースは、稲盛さんから3億円を寄付して頂いて設立しましたが、そのほかにも稲盛さんは学生奨学金のために5千万円の寄付もしています。当該コースは、マネジメントと起業家 研究と教育を行っています。ベンチャー・ビジネスコースでは、ビジネスマネジメントに関する講義を行っています。

それからここが大事ですが、この施設では、稲盛の経営哲学を伝えています。稲盛さんは京セラをつくった後、日本のKDDI携帯電話会社を設立しました。彼の基本的な考え方は、経営は人のため、世のためになるものだというものがあります。金儲けのために経営してはならないと彼は言いつづけています。「京セラ」、「KDDI」は日本の大手企業です。

最後に「ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー」についてですが、この施設は、ベンチャーとなりたいと思っている企業を対象に、彼らにとってインキュベーター機能を担っています。それから主として大学院生のための技術移転、ビジネスマネジメント等々の教育を行っています。自由で創造的な能力をもった学生を育てることを目的としています。さらに総合的な研究開発を行うプログラムを提供しています。それと最先端の技術、特にナノ技術開発を国内国外で、そして世界的研究者同士の意見交換などを行っています。

この施設は毎年1人くらいの情報交換をする人材を求めています。その費用はこの「ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー」がだすことになっています。ぜひベトナムからもくることを期待します。

秋山:補足説明があつたりましたが、日本側の6つのテーマがあつたりましたが、ご質問などがあつたぜひお願いします。

中山:鹿児島大学の留学生センターについて補足をしたいと思います。先ほどの留学生の話に関連して、鹿児島にきたときの日本語教育のことについてお話ししたいと思います。お手元にある鹿児島大学の英文28頁をご覧ください。

鹿児島大学には、留学生センターというセンターがあり

ます。4人のスタッフが、日本語と日本事情について教えています。教育学部でも全学の留学生講義を担当していますが、留学生センターでは、日本語の能力でクラス分けをしたうえで、日本語が上達するように教育しています。つい数年前までは2人のスタッフだったものを4人に増やし、中国語ができる人、英語ができる人が中心となっています。鹿児島大学に留学なさり、日本語と日本の事情に詳しくなりたいと思えば、当該センターで訓練を受けると勉強がよりスムーズにいくのではないかと思います。

鹿児島大学では、教育学部では英語だけで講義をすることは、日本の教員養成学部ですので教育学部にはありませんが、他学部では英語講義する教官がいます。例えば、水産学部、農学部、工学部では科目によっては英語で授業を行っています。鹿児島大学の国際交流委員会では、英語の授業を増やしていく方針もっています。

**肥後(カラモジア財団):**カラモジア運動の一つとしてホームステイがあります。単なるホームステイではなく、1年間畜産 園芸 自動車修理工場 ある特定の業種にホームステイをすることになります。1年間衣食住をともにしながら例えばこれからベトナムに必要な産業が沢山ありますが、廃棄物、糞尿処理のプロがいます。ベトナムに必要な産業技術について、ホームステイを通して学ぶという方向もあると思います。ただ大学のように単位がとれませんが、実務としての技術指導に関しては大きく貢献できると思います。カラモジア財団を活用すれば、渡航費を除けば生活費は必要ありません。

**秋山:**ありがとうございます。中村さん補足はありませんか。

**田代:**質問ではありませんが、鹿児島大学の田代です。ベトナムは今回がはじめてですが、1957年生まれで、ベトナム戦争中は少年時代にテレビのニュースで北爆のニュースをみていました。戦争で苦勞した国という印象が強くのこっています。最終的にはアメリカをうちまかした尊敬すべき国だ



と思っています。また、今回ベトナムに来て、なによりベトナムの交通事情、運転技術が高いという印象を受けました。今回神田さんの誘いを受けて、参加することができたことを大変感謝しています。

私自身、はじめて留学生を受け入れる経験をしました。タイの学生を受け入れ、非常にいい経験をしました。異文化との接触をしました。私は個人的には2年前に留学をしました

が、百聞は一見にしかず。アメリカにあまりいい印象をもっていない感でしたが、生活してみるといい面と悪い面を実感することができました。そういう意味では、我々がベトナムに來たり、ベトナムの青年が日本に來たりすることは大変重要です。

漢字文化圏とは違って、東南アジアは日本語で苦勞すると思いますが、英語ができれば必要最低限の意思相通をして、留学生センターのインセンティブコースで勉強すれば、短期間で相当日本語も上手になるというのが私の率直な感想です。英語だけでは不十分な学問がありますが、自然科学分野では英語ができれば博士論文をかけることはできます。しかし、英語で書くだけなら日本にくる必要はないです。やはり日本にくるならば、博士論文は日本語ではないにしろ、日本人と接しながら日本の経験をすることに日本への留学の意義があるのではないかと思います。

**坂爪:**農学部の坂爪です。ベトナムに訪問する機会が与えられてよかったです。現在ベトナムから留学生を二人受けている、といっても岩元教授が実際の指導教官であり、私はあまり関与していないのが実状です。それでも私がここに出てきましたのは、



先ほどの外国語師範大学の方から、ベトナムの学生が日本で学びたいという社会的需要があるので、鹿児島大学の教員がベトナムに来て、講義をするという話がありました。もし、2年くらいベトナムに来て、日本語を教えたり、下手な英語で講義をして、院生とともに調査研究するといったサテライト教室がベトナムにできたら、ぜひチャレンジしてみたいと思うからです。その実現にむけて、副学長などにご考慮頂ければと思います。

**秋山:**日本からベトナムにきている学生もいます。一言お願いします。

**平山:**鹿児島大学農学部の平山です。現在ハノイ農業大学でVACを組み合わせた循環型農業を勉強しています。私の目的は海外で農業をやりたいことです。気候の違う東南アジアではどのような農業をやっ



ているのか見たくてベトナムに來ました。農業大学は、市内からはずれているので市内の大学と環境が違い、学生と交

流が積極的にできるので嬉しく思っています。

ただ言葉の面では問題があって、ベトナム語はほんとうに難しいです。ベトナムを教えてくれるところはなく、あっても値段が高いです。ベトナムからみれば、語学学校は高いので、学生が自ら教えてくれるという意識の違いがあります。交流センターから学生を紹介してもらって、週に2回 英語を介してベトナム語の勉強をやっています。まだ充分ベトナムはできていないのですが、調査に参加したり、友達と遊んだりしています。これからもっと言葉を充実させて自分の専門を勉強したいと思います。

現在住んでいる寮はゲストハウスで、私を含めて日本人2人がいます。留学生は他にカンボジアとラオスから来ていますが、あまり交流ができていません。せめてラオスとカンボジア人と一緒に暮らせたらいいなと思います。今後ともベトナム人とどんどん接して生のベトナム語を上達させたいと思います。今回のシンポジウムでは、先生たちの情熱めいた話がきけたのが嬉しかったです。

**ハノイ農業大学の職員:** 留学生の寮が別格なのは、外国人のための治安を守りたいとのことで離れています。先ほど、交換留学生を増やしたいという話がありましたが、将来のためにそういう学生がぜひとも必要です。交換留学生を通して鹿児島大学との関係が、今後深くなると思います。



**秋山:** 既に時間が過ぎてしまいました。本来、司会がまとめるべきですが、今回のシンポジウムの主催

者である生涯学習教育研究センターの小栗先生に閉めていただきたいと思います。

**小栗:** 鹿児島大学の生涯学習教育研究センターの小栗と申します。本日は、生涯学習時代の日本とベトナムの大学改革に関するシンポジウムを行いました。現在日本とベトナムとの交流は深められつつありますが、このようなテーマでシンポジウムが開かれたのは初めてではないかと思われま。現在のように様々な分野で改革が断行されている時代において、ベトナムもこの5年、ないし10年の間に大きな変化があったかと思えます。日本も同様に近年大きな変化が起きつつあります。ここには、大学の関係者が多いですが、大学のあり方についての真剣な議論がこれから求められる時代になってきています。

本日のシンポジウムの報告では、大学改革を考える上で

「地域」または「環境」という言葉が強調されたかと思えます。今回は、大学と地域との関係については必ずしも十分な議論はありませんでしたが、様々な学問分野で活躍している関係者が集まり、ベトナムと日本のそれぞれの認識の違いや共通点が明らかにできたように思います。そのような交流ができた貴重な機会だったと感じています。

今後、大学が地域といかにつながっていくのか、または日本とベトナムがどうつながっていくのかが注目されます。もちろんお金というむずかしい問題や制度上の制約の課題は残されていますが、今後の課題の一つとして位置づけ、これから突破口を模索していきたいと考えています。このようなシンポジウムの場だけでなく、もっとフランクなかたちで交流する機会をもっていくことも大切だと思います。本日のシンポジウムの成果をまとめて、ぜひこの蓄積の上に次のステップにつなげていけるようにしたいです。

**秋山:** 報告書にまとめてお返しすることになります。ご協力有難うございました。

最後に閉会の挨拶を矢野副学長に

**矢野:** これで終了しますというので終わりかと思いましたが、最後に鹿児島大学として今後どうするかについて話したいと思います。午前中お話ししたように鹿児島大学の目標の3番目と4番目が、それぞれ社会貢献と国際交流です。これらを柱にしているとして、さらっと流してしまいましたが、国際交流の理念としては特に、東アジア、東南アジア、オセアニア地域の方向で国際化を進めたいと思っています。それと私自身は、地域に根ざした研究を進めていきたいと思っています。

こういうことからベトナムと鹿児島大学ですが、神田先生の挨拶にありましたが、心の交流と触れ合いが大切であるといわれました。実は、ベトナムに来てロイさんから日本人の心を学びたいといわれました。実は我々が、日本人の心はどこにあるのか探しています。日本はかつて農業国でした。特に鹿児島は農業が盛んな地域でした。鹿児島には「結い(ゆい)」というのがあり、これは、助け合いの精神のことです。日本は農業国から工業国に転換しました。効率性などを基本にして工業化を進めましたが、西洋の合理主義、効率性ではもうやっていけないことに気づき始めました。私たちは原点に帰って、ベトナムから何かを学ばなければならないと思っています。平山さんが1人でベトナムに来たことを初めて知り感動しました。我々は、そういう学生をたくさん育てたいと思います。

心も大事だが、お金も大事と言われました。我々も同感で

す。我々はベトナムの青年の夢を実現したいし、坂爪先生の夢も実現したいです。先ほどの師範大学のロイさんが、私たちが、ベトナムにきて講義することもあっていいのではないかと思うとおっしゃいました。私たちの3番目の地域貢献の役割は、これは日本への貢献だけではありません。世界への貢献にもなります。ベトナムにぜひサテライトをつくれたらと思います。もし坂爪先生が、ベトナムに来るならば、給料は鹿児島大学が提供します。これをきっかけにますます日本とベトナムの交流が深まることを願って、夢を実現できるように皆さんぜひご協力ください。これで終わりさせていただきます。

《シンポジウム 終了》

# Special Thanks to



記録の李哉法先生



通訳のロイさん



通訳のチュンさん



通訳のロアンさん



シンポジウム受付の女性たち

日航ホテル  
ハワイ



2004年12月23日

ベトナム関連施設の表敬訪問

## 訪問先

- \*1. ハノイ外国語師範大学
- \*2. ベトナム政府教育担当者
- \*3. ハノイ貿易大学
- \*4. 日本研究センター
- \*5. ハノイ農業大学
- \*6. ベトナム日本大使館

## \*1. ハノイ外国語師範大学との懇談



ハノイ外国語師範大学は、国家大学のなかのひとつであるが、それぞれ自然科学大学、社会科学大学、外国語大学として独立採算をとっているため、実質的に独立した大学として考えてよいという学長のあいさつである。大学間の姉妹関係は、独自に結ぶ権限をもっているため、鹿児島大学と姉妹関係をもつ場合は、ハノイ師範外国語大学が交渉の相手になる。

ハノイ外国語師範大学は、外国語の教員養成を目的とした大学であり、日本語・日本文化の教員養成にも力を入れていきたいという学長の話であった。日本語を学びたい学生はベトナムでは多いが、教師が絶対的に不足している。ハノイ外国語師範大学は1学年40名である。日本との姉妹関係の実績も少なく、熊本学園大学との姉妹関係があり、早稲田大学と東京大学で短期間の研修をしてもらった程度である。

ベトナムでは日本語教育を高校で普及させたという考えがある。その試行を現在実施している。この大学でも英語の教師は160名いるが、日本語はわずかに10名



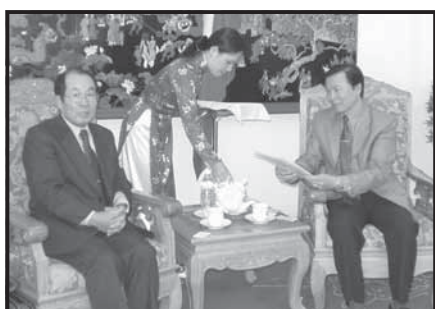


足らずである。近年、日本との関係もよくなり、社会的に日本語の需要は高まっているが、教育の方がついていけない状況である。

日本語・日本文化の教員養成のために日本の国立大学の援助がほしい。日本の大学人が直接的にベトナムに来てもらって半年から1年間滞在して、授業をしてもらったら非常に助かる。日本の学生がベトナム語やベトナム事情を学べるように、こちらとしても考えていきたい。

## \*2. ベトナム政府教育担当責任者との

### 懇談



ベトナム政府の迎賓館でベトナム政府の教育担当責任者との懇談をもつことができた。ベトナムでは先

進国の教育の状況について学んでいきたいということで、2010年までに教育分で外国との協力関係を強固にしていく計画をもっている。日本との関係では、学生の教育期間の半分は、ベトナムで後半は日本で教育ができるようなしくみができないものかと思っている。オーストラリアの大学は、そのような方式でベトナムに進出してきている。ベトナム政府は外国の大学の設立を歓迎している。100%外国投資の大学でも大学の計画がしっかりしていれば、ベトナム政府として土地の提供をする。ベトナム政府は、人間を育てていくことを大切に思っているが、教育の質があまり高くないのが現状である。農業、医学、工業技術など鹿児島大学の協力をぜひともほしい。

鹿児島大学のみなさんがベトナムに関心をもって代表団をこのように送ってきていることにベトナム政府としても大変に感謝している。日本語ができる人が少ないので、ぜひとも、その教育に手を貸してもらいたい。日本とベトナムは



文化的に近いところがたくさんある。先進国の援助のなかで日本が最も多く、ベトナムは日本の投資効果も最も大きい。

鹿児島大学としての具体的な提案をぜひとも聞かせてほしい。規模が大きければ政府として対応していきたいし、小さな規模であれば地方政府にお願いする。

## \*3. ハノイ貿易大学との懇談



鹿児島大学との共同研究ができないかと考えている。日本企業のベトナム進出における条件はなにか、ベトナムのWTOの加盟の条件はなにか、どうしたら可能か、日本は東南アジア諸国の会議に何が提案できるのか、経済と文化との関係など様々な共同研究の課題が考えられるが、ぜひともできるところから共同の研究を実現したいという要望である。貿易大学は、日本語を学んでいる学生は600名いるが、日本語の教師は10名と非常に少ない。



## \*4. 日本研究センターでの懇談会

日本研究センターはベトナム政府の社会科学院のなかにあるひとつの部署であり、

10年まえに設立された政府機関である。研究部門を中心に組織されている。40名の研究者を有しており、研究者を各大学に派遣して、各大学との日本研究の連携活動をしているが、日本の研究者との交流が十分ではなく、日本の大学との交流協定の締結なども大きな課題になっている。マスターコースとドクターコースを設立していく計画である。ベト

ナムでは、研究と教育が分離していたが、研究者を養成していくということから日本研究センターとしても日本学コースを設置していく予定である。



## \*5. ハノイ農業大学との懇談

副学長と国際関係部長と会談する。最初にハノイ農業大学の紹介があり、その後①ベトナムと日本の学部生の交流状況と問題、並びに、学生交流の今後の可能性について、②鹿児島大学で考えている研究交流について、③北部の山岳民族のところで活動したいので、ハノイ農業大学での研究状況とハノイ農業大学に学ぶ山岳民族の学生の状況について意見交換をおこなった。

ハノイ農業大学は、ベトナムの中でトップ10に入る大学で、外国との関係はあるが、日本の大学との関係が一番密である。現在、鹿児島大学、東京農業大学、東京農工大学、京都大学、佐賀大学、琉球大学、九州大学と交流があり、九州大学とは、JICAのプロジェクトを共同でやっている。第2のJICAプロジェクトを申請し、今認可を待っている最中である。大学職員は860名で、国が直接給料を支払っている。そのほか300人の非常勤職員がいる。学生数は1200人で、10の学部によって構成されている。日本に留学して先生になったものもあり、日本で短期間の研修を受けた職員もいる。副学長自身、今度慶応大学と京都大学で教えることになった。JICAの支援のおかげで、設備についてもいろんな国より支援を受けている。

①交流について：留学生の交流は、大学の戦略。留学生の交換は、大切だと大学は思っており、交流に話しを持ってくる大学を高く評価する。ただし、外国人留生の宿泊の状況がよくない。言語にも大きな問題がある。使用言語は基本的に英語だが、学生を出すのも受け入れるのも英語のレベルが低い。外国語センターをつくりたい。

②研究の課題：共同研究やっている大学には、九州大学、慶応大学、京都大学があり、それなりの研究交流はできる。学部が10あるので、鹿児島大学との幅広い研究分野で交流できる。これから展開する具体的なプロジェクトがあればやりたい。

③山岳民族のこと：山岳民族の学生を受け入れており、政府の研究プロジェクトをやっている。他にも外国の支援で、山岳地帯の発展のためのプロジェクトをやっている。例えばJICA、スウェーデンのシダ(JICA同種)、デンマークのダリダ、アメリカのフォード基金、ロックフェラー基金等。彼らは、ベトナムの山岳地帯に興味を持っており、社会、政策、体制の研究、さらに、経済、市場の研究、技術の研究が、政府によっても進められている。山岳地帯の学生を支援する(進学ができる条件をつくる)プロジェクトもある。その地方の学生は、勉強する条件は厳しく、大学の入学試験に合格することもかなり難しい。入学ができてても大学院へ進学する可能性は低い。他の大学でもプロジェクトを展開しているが、主導するのは農業大学である。したがって、山岳のプロジェクトがあれば、積極的に進めたいと思う。来年の4月に「山岳地帯の市場を開発する」という課題の国際規模のセミナーを行う。



日本側から：カラモジア財団の活動紹介並びに、日本の農家で学生が受け入れる用意がいつでもあることを伝える。日本に留学を希望する人には、ベトナムで日本語の試験を受けることを要請し、鹿児島大学への短期留学の候補者をつくっておくことを依頼。大学のプログラムで、ミャンマーとタイ以外にもベトナムのコースをつくる計画があり、その際の受入をお願いする。研究の面では、鹿児島大学の遺伝子源研究所が、ベトナムの自然遺伝資源を集めたいといっている旨を伝える(副学長から、政府の管理したプロジェクト内でしか持ち出せない点が伝えられた。)

懇談のあと、一行は農業大学内の施設見学をおこなった。JICAから派遣されている瀬古先生とも会談し、鹿児島大学の留学生のゲストハウス(寮)にも足を伸ばした。

昼食を挟み、農業経済学科にも訪問し、情報交換をおこなった。





留学生平山さんが寮の前庭で育てる畑



ゲストハウス

## \*6. ベトナムの日本大使館



ベトナム大使に今回の鹿児島大学の代表団の目的とこれまでの訪問先等の報告を行う。

大使からは、ミクロ研究ができる人はいるが、地域研究をできるひと

が日本では少なく、今回の鹿児島大学の考えは広い交流をしたいということと理解したとコメントをもらう。

今年日越外交30周年だが、一番かけているのは、知的交流であり、日本からの知的発信が少ない(語学の問題)。専門領域に特定するのではなく、オール鹿児島でやるのはよい。

その後具体的な案について質問があり、団長より、人間を含めた経済発展を逆提案したい旨と、具体的には、農村の分野、山岳民族のことができたかと考えている点を伝える。大使からは、非常に政治的に安定したベトナムで不安材料は少数民族であること。経済的格差と共産主義と宗教の対立があること。したがって、山岳地帯へは中央政府に諂りながら誤解がないようにすることの助言を受ける。

また、今回、鹿児島大学のサテライト校構想という大きな宿題をもらったことを報告し、日本の学生が山岳民族とともに学習体験をすることや、教員養成のプログラムの中に外国体験をプログラム化することを考えている旨を報告する。大使からは、そのような取り組みを歓迎する旨が伝えられ、ベトナムで日本語を普及するように大臣に働きかけているが、需要はあるものの日本語の教員が足りない状況の説明がある。

サテライト校として鹿児島の教官が研究する場所として、大使からは、日本研究センターではなく、大学を推奨された。ただし、大掛かりなものとなるので、具体的にこういうかたちというものがないと大使館側として進めることができない。ただ、現在大使館とベトナム政府の間で進行しているハノイ大学の試みでは、国際交流基金から日本語教師を派遣する予定。ここに鹿児島大学から派遣しても拒否されない



だろうという。最後に団長より、大学が関わるので、単に日本語だけでなく、日本の文化、文学、歴史、技術学をやりたいと考えている旨と、副学長からは、具体的なプログラムを出したい旨が伝えられた。



ベトナム日本大使館前の集合写真

## 2003年12月23日 ハタイ省の訪問

### 訪問先

- \*1. ハタイ省 竹細の伝統工芸の村
- \*2. ハタイ省人民委員会委員長(知事)との懇談
- \*3. ハタイ省 絹の伝統工芸の村
- \*4. ベトナム政府 教育養成省副大臣との懇談

## \*1. ハタイ省竹細の伝統工芸の村

### 村長との懇談と村の視察

村長より伝統工芸の村の実態についての話がある。村の面積846平方メートル。人口8900人、1890世帯うち8割が



竹材、麻材を使って籠をつくっている。部落が7つある。優れた職人は10名、一番年よりは、83歳、若いのは45歳。この10人は、同時に先生の務めも果たしている。ワーカーは、250人。

いろんな商品を作成している。ここで製作されるものは、ほとんどが輸出用。日本にも輸出している。今の問題点は、デザインと技術。商品は3つの形態で作成されている：会社、共同組合、個人である。商品をつくるのは、家庭の中でほとんど手作業。各農家の家庭で作成し、会社がそれを購入する。商品をつくることによって村の人々の生活はよくなった。ほとんど手で作られている。

質疑の中で村について村民の生活や教育の仕組みについて知ることになる。1890世帯月で平均の所得が、大人の収入：一人当たり400,000ドンから500,000ドン。子どもたちも半日生産の手伝いすることで、月に100,000ドンの現金収入がある(半日は学校)。村には、幼稚園、小学校(5年間)、中学校(4年間)が、各1校づつある。高校(3年間)は、ベトナムにおいては、いくつかの村に一つ。高校には、村から通っている。義務教育は、中学校まで。うちの村も中学校は、普及している。小学校までが無料。中学校は授業料がかかる。村が負担している。一部、教育省の保護。村の人民委員会がある。村も村の教育委員会がある。教育委員会は、幼稚園、小学校、中学校を管理している。小学校、中学校の教員は、ハタイ省の教育委員会から派遣され、村には、選ぶ権限はない。この村から多くの子どもが

大学に進学する(現金収入があるので可能)。

私は、村の人々に選んでもらい、任期は5年で、私は、4期目、52歳。33歳のときから村長。村の共有財産や村の事業についても若干の説明があった。

村長の話の後には、実際家々を訪問する。



## \*2. ハタイ省人民委員会

矢野副学長の挨拶の後、人民委員長よりハタイ省の方針が語られる。ハタイ省は、まずベトナム政府に基づき実行しなければならない。教育分野では省としては、外国と協力を



したい。手工業の省であるため職業訓練についても協力してもらいたい。だが郁也学校の設置移転には歓迎し、日本の教訓や教育について勉強したいと思っている。日本に留学したい人は一杯いるがコストが高くて行けない。日本に留学させる代わりにベトナムに大学ができればよい。両国の友好関係はもっとよくなる。

ハノイの土地が狭くなったので、ここハタイ省(ハノイより10キロ)に新しくハノイ国家大学を建設することになった。国家大学は10大学より構成し、大学の敷地面積は、1000ヘクタール、5億ドルが建設費、2015年までに14万人の学生を受け入れる予定。ここは大学のセンターになるので、日本の大学もここにあったほうがいいと思うので検討していただきたい。皆さんの都合もあると思うが、鹿児島大学は日本の大きな総合大学だと聞いているのでぜひ協力して欲しい。

今回の視察団の目的を継げたあと、委員長より具体的な提案を求められる。その際、ハタイ省が、伝統文化の手工業の村が沢山あること、人口の90%が農業をしていることを特徴とし、農民の生活がよくなるように力を入れたいとの考えを示す。矢野副学長からは、鹿児島大学の教官がベトナムに来て、指導者を育てるという考えをもっている旨を伝え、教育学部の改革に関連して、日本語を教える教師をベトナムに派遣する教育システムをつくりたいこと。そして、まだ実現性は不透明だが、大学とは別に経営に関するコースをベトナムにつくることも考えたいことの説明があった。

## \*3. ハタイ省 絹の伝統工芸の村

絹の村は、工場見学のみ

## \*4. ベトナム教育養成省の

### 副大臣との懇談

最初に副大臣より挨拶がある。教育行政関係は、日本にベトナムの小学校を沢山つくってもらい、大学の交流も応援してくれている。そして、今回短期間だけど、ベトナム代表団が訪れてくれて意味が深い。国と国の関係は30年だが、中部に日本人町があり、ここはベトナムと日本の交流300年の歴史がある。副大臣自身日本には5～6回出向き、今



でも興味をもつ。もともと数学教師で、ノーベル賞を受賞した田中さんの生徒といっても過言でない。



その後、矢野副学長よりシンポジウムで使用した資料に基づいて鹿児島大学の説明がなされる。

それを受けて副大臣より、鹿児島大学で一番強い学部について質問がある。これにつ

いては、特に強いものはないが、教育内容と研究内容に特徴があると説明がなされる。①日本の近代化を成し遂げた地域であり、新しいエネルギーをもっている、②同時に大変古い文化を大切にする、③そのような特徴をもちながら、地域に根ざした、地域のための教育研究を熱心になっている(例として医学部の地域医療と離島医療、教育学部の僻地教育、農学部のフィールド研究・環境保全等をあげる)。

日本側からは、今回ベトナムにコンタクトパーソン、キーパーソンがいなかったため苦勞したことを伝え、今回の訪問で各方面から日本人の教員の派遣や共同研究の要請を受け、それに応えるためにサテライト大学を作るときのキーパーソン、機関としての責任をつくって欲しいと要望する。この要望に対して、副大臣より即答がある。機関としての責任は、ベトナム教育養成省の国際関係部、担当者は、同席した国際関係副部長のフン氏。以後、連絡はこちらに取るようにといわれる。

副大臣からの要望は、ハノイだけでなく、中部、フエやホーチミンにもできる限り行って欲しいこと。ハノイだけではなく、他の地域の大学にもシンポジウムに参加してもらいたい。今度は、数百人規模で実施してもらいたい。各関係者や大学の代表者だけでなくベトナムのお父さん・お母さん・学生さんに宣伝して欲しい。続いて3点伝えられる。

①鹿児島大学の情報をもっとベトナムの人に知ってもらいたい。皆さんと協定を結んだら、授業料は免除されるということは、ベトナムの学生にとってはよい条件。優秀なベトナム人を送れるはず。大分の立命館は、3年間で200名の留学生を受け入れた。個人的に私に名誉教授を与えてくれている。

②ベトナム政府から日本政府への要望プロジェクトについて。現在、ベトナムとJICAの山岳の僻地教育の応援に参加する姿勢があったようだ。6の省(山岳地帯)を応援したあとベトナムの中部山岳地帯に同じプロジェクトで応援してもらいたい。3つ目は、メコンデルタ。こちらの教育分野に協力してもらいたい。

③先生をベトナムに派遣してもらい、各大学と連携していくことは応援したい。大学院でも、ドクターコースでも、



学部でもいい。接した大学から一つやってみたらいいと思う。こういうふうに鹿児島大学から先生を派遣してもらえると教育の機会を受けられるし、難しい問題を解決できると思う。市場経済導入でよい面もあるが、マイナスの面として、農村と都市、山岳と平野部の格差が大きくなってくる。鹿児島大学は、豊富な経験をもっている。山岳地帯、僻地教育にも協力してもらいたい。たとえば、鹿児島大学と農業大学との連携コース。足りない分は、私たちに申請し、検討した上で、こちらからもお金をだす。キーパーソンだけでなく、事務所も必要。農業大学か、師範大学にお願いできる。

最後に「強調したいことは、先進国から何を学ぶのか。これまでは、技術ばかりだったが、一番大事なのは、教育なのではないか。生涯学習の時代。数年後にベトナムに鹿児島大学の分校をつくって欲しい。」との要望があった。

国際関係副部長からは、日本人留学生の問題に関連してベトナム語の習得と寮の問題が改善されない背景には、ベトナム側の厳しい金銭事情があることの説明がある。また、鹿児島大学からベトナム大学に派遣することは、次の3つのメリットが考えられ、①日本の先生の姿勢、レベルからベトナムの先生が学べる、②学生も高いレベルの先生から学びたい、③より多くのベトナム人が教育の機会を得られる、したがって、今後の連絡は、副部長宛てか、部長宛てでお願いしたいとコメントがあった。



教育養成省副大臣と国際関係副部長と共に  
ホーチミンを背に記念撮影

以上、鹿児島大学代表団としては、大きな成果を得ることになったベトナム訪問であった。

鹿児島大学ベトナム訪問団

学部	名前		職名
生涯学習教育研究センター (教育学部)	神田嘉延	かんだよしのぶ	生涯学習教育研究センター センター長 (教育学部教授)
	小栗有子	おぐりゆうこ	生涯学習教育研究センター 助教授
教育学部	中山右尚	なかやまゆうしょう	教育学部学部長 教育学部教授
	内田芳夫	うちだよしお	教育学部教授
	小柳正司	こやなぎまさし	教育学部教授
農学部	岩元泉	いわもといずみ	農学部教授
	秋山邦裕	あきやまくにひろ	農学部教授
	田代正一	たしろしょういち	農学部助教授
	坂爪浩史	さかづめひろし	農学部助教授
	李 哉法	いじえひょん	農学部助教授
工学部	矢野利明	やのとしあき	鹿児島大学副学部長 工学部教授
(財)カラモジア	肥後隆志	ひごたかし	理事長
	中村義幸	なかむらよしゆき	理事

12月20日(土)鹿児島出発

12月21日(日) - 12月24日(水)ベトナム滞在

12月24日(水) 23:50 ベトナム出発

代表責任者 神田嘉延

(文責: 小栗有子, 李 哉法)